

《書 評》

松尾展成, 『日本＝ザクセン文化交流史研究』,

大学教育出版, 2005年

武 智 秀 夫

(労働者健康福祉機構吉備高原リハビリテー
ションセンター名誉院長・森鷗外記念会理事)

瀬 戸 武 彦

(高知大学人文学部教授)

上 村 直 己

(熊本大学名誉教授・日本独学史学会会長)

第1章－第2章 武智秀夫

書評を書く前に私の立場を明確にしておこう。私は経済学者でもなく日本＝ザクセン文化交流史の研究家でもない。

私は医師で、趣味として医学史に興味をもっており、その一つとして森鷗外のこと（特にドイツ留学について）を調べているものである。

森鷗外は陸軍軍医であると同時に多くの創作、翻訳、評論の業績がある。鷗外のドイツ留学に関する論評はずい分多い。そのほとんどは後年の文学的業績とドイツ留学を結びつけた考証であるといっても過言ではなからう。つまりドイツ留学中の出来事をレトロスペクティブに考証していると言ってもよいと思う。

鷗外がドイツに留学したのは満22～26才の若者の時期である。鷗外の行動、社会性を年令相応のものとして、つまり留学当時の視点でとらえ、考証するのも一つの方法だと私は考え、そのような観察を心がけてきた。

著者は後年の大成した鷗外の文学作品に接していることであろうが、それらに影響されたレトロスペクティブな記述は本書にほとんどない。留学時代に限って考証してある。

この点著者の鷗外研究のスタンスは異色といえよう。私には十分共感できるが、多くの鷗外研究家はどのように受け取るであろうか。

これが第1章、第2章を通読した印象である。

つぎに各パラグラフごとに眺めてみよう。

「第1章第1節」では鷗外とザクセン軍との関係、すなわち演習への參與、軍醫講習に陪列、それに王宮への參内が、今までに発表されたいろいろの論考を引用して述べられている。「第2節鷗外の

訪問先」を含めてその引用の詳細なこと、調査の正確なことは、ただ敬服するばかりである。

「第3節ドレスデンの宮城」では王宮3階の平面図が示され、各室がたくみに解説してある。ドイツ3部作の1つ「文づかひ」の記述と結びつけた解説は見事である。これからしても私は獨逸日記にある王宮参内は事実と考えたい。

「第4節宮城の磁器室」も著者の「陶磁の東西交流史に関して、ささやかな試みをしてみたい。」という願いが実現されていると思う。

「第2章鷗外が交流したドイツ人」は「第1節」に記してあるように「SHB（国政便覧）」、「PM（ライプツヒ警察登録簿）」が用いられており、これからの鷗外研究に多くの利便を提供するものと考えている。またザクセン陸軍省、ザクセン軍団も明確に示されている。

「第2節」には、交流したドイツ人ひとりひとりについて詳細な記述がしてある。そして「第3節」には人名索引がつけられており、今後鷗外のザクセン滞在中の研究には必須の資料になると考えられる。

本書第1章、第2章には私の論考もいくつか引用して頂いた。著者は細かく読んで下さり、誤字・誤植なども訂正頂いた。

著者の細心で緻密な御労作に満腔の敬意を表したい。

第3章－第5章 瀬戸武彦

この度上梓された『日本＝ザクセン文化交流史研究』は、著者松尾展成氏の45年余に及ぶザクセン経済史研究の一環から産み出されたものと言える。ザクセンに関しては、細部のどんなことも見逃さないその姿勢が、この度の著書にも如実に現れている。書評者の研究姿勢は甚だ大雑把で、著者からは折に触れて論文等における誤謬、錯覚、思い込みを指摘されてきた。このことを思うと書評を担うには不適任であると自覚しているが、第2部「日本とザクセンの人的交流」の第3章から第5章については、書評者も多少通じているところがあるので、敢えてこの任を受けた次第である。

先ず章別に論評し、最後に総評を述べたいと思う。

第3章の「来日したザクセン関係者」は、1998年に本学会の『岡山大学経済学会雑誌』第30巻第1号に掲載された同名論文（資料）に加筆したもので、一種の人名辞典である。先の論文では50名の人物が採り上げられたが、この度の『日本＝ザクセン文化交流史研究』第3章では、59名と9名増加している。著者が記しているように、第4章で採り上げるオットー・レーマン、及び第5章で採り上げるクラウスニッツァーも本来ならこの章で扱う人物で、その場合には61名のザクセン関係者となるものであった。しかしこの二名については歴大にして詳細を極めたことから、独立した章が設けられている。

前述の論文への大きな加筆部分は、(3) エンゲル、(7) ゲプフェルト及び(13) シュテヒャーの三ヶ所と言える。この三名はいずれも第一次大戦時の日独戦争による俘虜（当時は「捕虜」の語の代わりにこの「俘虜」の語が使用された）である。三名の他にも俘虜となった人物としては、(43) ベ

ルリーナーと（54）ユーバーシャルの二名が採り上げられている。しかし前者については、近年他の研究者によってかなりのことが調査されたことから、参考文献を追加した以外は僅かな加筆に留まり、また後者に関しては、収容所からの解放後は日本で終生暮らしたことから、同様に新たな文献の紹介程度に留まっているのは何ら不思議ではない。

さてエンゲル、ゲプフェルト及びシュテヒャーの三人の内、前二者は新規に取り上げられた人物で、シュテヒャーは大幅に加筆された事項である。この三名の記述において、エンゲルには28項目の注、ゲプフェルトには16項目の注、シュテヒャーには24項目の注が付けられていて、他の人物の記述との相違は際立っている。そこで第3章については、特にこの三人の事項について論評し、最後にその他の人物について若干言及したい。

(3) パウル・エンゲル

エンゲルは10数年前から、主として板東俘虜収容所における音楽活動によって、研究者の眼が向けられるようになった人物である。第一次大戦時、日本各地にドイツ兵を収容する俘虜収容所が設けられたことは、今日少しずつ知られるようになった。しかし、エンゲルを始めとするドイツ兵俘虜の活動・経歴等について、これまで調査・研究の眼が十分に注がれてきたとは言いがたい面があった。エンゲルについて言えば、その出生地すらはっきりしなかったのである。そうした中で著者は、歴史学者としての研究手法を遺憾なく発揮して、飽くことなく調査の手を伸ばした。ドイツの役所の戸籍部からエンゲルの出生を記した公文書のコピーを入手したのは、その顕著な一例である。また、東京の防衛研究所図書館は、俘虜収容所や俘虜に関する基礎資料があることから、多くの研究者が足を運んでいたにも拘わらず見逃してきた一次資料を、著者が発掘した事も強調されるべきであろう。

著者のエンゲル探索への情熱と執念は、本書中にもその名が触れられているドイツ人研究者にも伝わって、やがてエンゲル自身の手になる「自伝」の発掘に繋がった。それが更に上述の出生記録の入手に至ったと言える。エンゲルは日本の収容所から解放されて蘭領印度（今日のインドネシア）に渡ったが、1925年以降の消息は杳として不明である。著者を含めて数名の研究者が、今日なお調査していることを記しておきたい。

(7) ゲプフェルト

アルトゥーア・ゲプフェルトについては先行するいくつかの文献によって、第一次大戦前から東京麻布に住み、妻子が収容所に面会に訪れたことなどから、研究者の関心と呼ぶ人物であった。しかしながらその生涯については、一切不明のままに放置されていた。先行文献の中にはこのゲプフェルトを、幾分似通った名前をもつ同じく俘虜だった下士官ゴッペルトと混同しているものもある。しかし著者はドイツの戸籍部等の一次資料によって、その混同を完全に排除した。本項目では直接触れられてはいないが、『岡山大学経済学会雑誌』第36巻第1号に掲載された著者の「4人の板東収容青島捕虜」は、本項目に繋がった論文である。その中で著者は、アルトゥーア・ゲプフェルトの人物確定に至るまで同姓同名の人物にも突き当たるが、当該人物の確定を見事に成し遂げている。またその調査・研究過程で、先行する諸文献で参考・引用されてきたある書物を、史実研究の上では全く価値の

無いものと断定していることは、著者の研究姿勢を明瞭に物語るものである。書評者を始めとして、俘虜研究に携わる多くの者へ警鐘を鳴らしているとも言えよう。

(13) シュテヒャー

日独戦争での俘虜の中でも異色の存在と言えるこの人物について、従来その諸関連はほとんど調査されてこなかった。この面でも著者は輝かしいまでの研究成果を提示した。本書第1部第2章「鷗外が交流したドイツ人」の(49)ステツヘルで触れてもいるが、ザクセン軍医監を務めたその父親に関して、著者や書評者を含むインターネット研究組織において2005年に公表した研究「日本とザクセンを結んだシュテヒャー父子」は瞠目に値する。シュテヒャーの父親と森鷗外との関わりを示したものであるが、これは著者の調査・研究の広がり余す所なく見せている。また、シュテヒャーと親密な関わりをもった猪狩亮介、山田耕三の二人の軍人についての追跡調査も、著者によって始めて本格的に行われたと言える。しかしそれでもなおシュテヒャーの日本における活動、特に俘虜となる前の活動には不明の部分があるので、著者の更なる調査・研究が切望される。

ここで今一度第3章全体に立ち戻ったとき、ある思いが生じることは否めない。つまり、記述量に余りの格差があるのでは、との素朴な感想を抱く読者がいるのではないだろうか。今日の東京大学医学部の基礎を築いた医師エルヴィン・ベルツと、「フォッサマグナ」の命名者にして、かつ「ナウマン象」にその名を留め、また若き日の鷗外森林太郎との論争で知られる地質学者エドムント・ナウマンとに関する記述が、これまで触れてきた三者の記述とに、余りに量的な違いが見られるからである。ベルツに関してはその日記が昔から知られ、多数の関連文献があるので、記述は他の文献に譲っても十分であろう。しかしナウマンに関しては、もう少し調査がなされてもよかったのではないだろうか。糸魚川市のフォッサマグナミュージアムに言及され、最近の文献も挙げられているが、四国におけるナウマンの活動が全く見過ごされていると言える。特に高知を二度訪れ、地元の化石収集家と親密な関わりもち、記念にドイツ語の詩を贈呈してもいる。その詩は地殻変動を読み込んだ、いかにもナウマンらしい詩で、今日では表装されて高知市近郊の佐川地質館に飾られている。この珍しい事実についての調査までに至らなかったことは、書評者にとっては残念な気がする。

なお、人物名は五十音順に配列され、章の末尾にはアルファベット順の人名索引が付いているが、本論の箇所でも言語綴りがあれば、より親切であっただろう。

第4章の「久留米「収容所楽団」指揮者オットー・レーマンの生涯と音楽活動」は、第3章にも組み入れることの出来る人物であるが、その膨大にして詳細な調査から、独立した一章が設けられている。レーマンは第一次大戦時に日本の収容所に収容された俘虜だった。その意味で第3章のエンゲル等と共通する人物である。レーマンの久留米収容所内での音楽活動については、先行文献において多少記されている。しかし、その生涯となると全く触れられずにいたのがこれまでの状況であった。本章第3節における「オットー・レーマンの生涯」には、遺族を探し当てて、遺族から提供を受けた資料、またドイツの文書館や郡役所等からの資料等が活用されている。特に「履歴書」が紹介されてい

ることで、その人間像が浮かび上がっていることがこの章の特色である。この「履歴書」は、出生から1934年に至るまでを本人が自伝風に綴ったものであることから、謂わば「生身」のレーマンが眼前にいる思いがする。圧巻は第5節の「久留米収容所楽団収支決算書」であろう。この第5節は年月日を含む数字的な記載によって構成されていて、この節だけで注は123にも及んでいる。さながら家庭の家計簿風で、一見無味乾燥な感じを抱かせる。しかし、具体的な数字が挙がっていることで、却って人物像やその活動が鮮明に浮かび上がっているとの思いを抱くのは、書評者一人ではないであろう。なお、この第4章全体の注の合計は実に317に達している。

第5章の「板東「ドイツ牧舎」指導者フランツ・クラウスニツァーの生涯」も、第3章に組み入れることの出来る人物であるが、その膨大にして詳細な調査から独立した一章をなしている。クラウスニツァーも第一次大戦時に日本の収容所に収容された俘虜であった。クラウスニツァーにおける記述においても、ドイツの文書館や郡役所、戸籍部に調査依頼して、教会の堅信礼証書を入手することを始めとして、その遺族を探し当てて、遺族から資料等の提供を受けて、クラウスニツァーの生涯の記述に活かしている。それによってクラウスニツァーの記述は、オットー・レーマン同様に詳細・緻密を極めていく。こうした研究・調査の方法は著者の独壇場と言えるもので、余人の追隨を許さぬところである。板東収容所時代のクラウスニツァーの活動、特に「ドイツ牧舎」での活動には、行動を共にした日本人松本清一の記録を巧みに用いて、クラウスニツァーを髣髴させるが如くにはありありと描写している。著者にしては珍しく物語風になっているが、著者の従来からの姿勢と矛盾するものではない。恣意的なものが一切混じっていないからである。

著者がドイツ兵俘虜に眼を向けるようになった1998年頃から、さながら符牒が合うかのようにドイツ兵俘虜の研究が活発化した。このことは単なる偶然ではないであろう。ドイツ兵俘虜研究の情報にまだ接していない読者には、本稿で採り上げた五人の人物に関して、著者の記述が持つ意味を俄かには図りかねないかもしれない。しかし、「日本におけるドイツ2005/2006」、いわゆる「ドイツ年」における日独双方での大きなテーマの一つ、つまり「日本におけるドイツ人俘虜」の研究においては実に大きな意味をもっている。歴史上、最も多くのドイツ人が日本で生活していたのは第一次大戦時であった。5000人以上のドイツ人が暮らしていたとされているが、実にその八割が収容所の中にいたドイツ兵俘虜だったのである。

長く見過されてきたドイツ兵俘虜の問題は、今後光が当てられるであろう。それは著者と書評者が共有して抱いている思いであるが、本書がそのきっかけの一つになれば、と願って筆を措きたい。

第6章 上村直己

第2部「日本とザクセンの人的交流」の第6章「ザクセンに滞在した日本人」は、明治から現在に至るまでの間にザクセンに3カ月以上滞在した日本人に関するデータ集である。すなわち、1873年（明治6）10月にフライベルク鉱山大学に入学した今井（岩佐）巖、及び同時期にライプツィヒ大学

に入学した木下周一から1998年に至る125年間にザクセンに滞在した441人が対象になっている。そして各人物について名前・出生地・生没年・専門分野・滞在期間・出国時の地位・帰国後の地位・経費負担者・ザクセンでの受入機関・典拠文献等を記している。

10年前、東京都立大学経済学会研究叢書としてラウック (M. Rauck) 氏の『ドイツ語圏における日本人の名簿』(*Japanese in the German Language and Cultural Area, 1865-1914*) が出版され、その詳細な調査に驚いたことがある。松尾氏の書もその影響を受け、依拠している部分は多い。だが、ラウック氏の本は明治から大正初期までが対象なのに対し、本書はザクセンに限ってはいるが、それ以後も対象にしているのが特色である。のみならず前書に抜け落ちた人物を補い、かつ同一人物についての情報量も多くなっている。

松尾氏は正確を期すために多くの時間をかけ、細心の注意を払って本書を完成させたことが「初めに」や「あとがき」を読むとよく分かる。特に過去の文献を丹念に拾っているのには頭が下がる。これは研究者としての著者の誠実を示すものであり、今後、当該人物を調べる際に大いに役立つことは言うまでもない。いずれにしろ、ラウック氏の本と松尾氏の今度の本は特に人物を中心とした日独交流史を研究する場合、基礎的資料として利用価値が高い。従来、この種の研究においては一部の有名な人物に偏り勝ちであったが、松尾氏は有名無名に関係なく、3カ月以上ザクセンに滞在したほぼ全員を取り上げている点が貴重である。本書によって歴史の流れの中で忘れられていた人たちが記録され、紹介されたことは意義深いと思う。

ザクセンには明治以来日本人にも馴染み深いライプツィヒ大学があり、鉱山学、冶金学専攻者にとって憧れのフライベルク鉱業大学がある。この最も多くの日本人が留学した二つの大学(ライプツィヒ大には221人、フライベルク鉱業大には47人が留学している。)は幸い大学文書館が充実している。ターラント林業大学に留学した人の資料は現在ドレーズデン工業大学の文書館にある。それで時間さえかければ調査は比較的容易である。尤も日本人の名前はローマ字で書かれているので、有名人ならともかく、日本人の名前を特定するのは結構手間取るものである。ひらがな表記の人名が散見されるのはそれを物語っている。調査が困難な陸軍関係者についてもザクセン軍団の項目を設けてライプツィヒ滞在者7人、ドレーズデン滞在者24人の名が挙げられているのは注目される。滝廉太郎が留学したライプツィヒの「音楽学校・ゲヴァントハウス」には全部で18人しか留学していないのは意外だった。クラシック音楽の分野での終始変わらぬ日独の結びつきの深さからもっと多いと思ったからである。それから日本人には余り馴染みがないと思われるグローゼンハイン、ミットヴァイダ、リーザ、パウツェン、グリマ、ツィッタウ、ケムニッツなどに滞在した人をも取り上げているのは著者ならではのことであろう。磁器で有名なマイセンについては記載がないが確認できる日本人の滞在者はいなかったのだろうか。

ここで気づいた点や疑問に思った点などについて少し述べる。藤代禎助(正しくは禎輔)、金子馬次(正しくは馬治)などの誤記があるが、これは参考にした資料に元々誤記があったためと想像される。これは人事興信録など信頼のおける人名録に当たっていたら避けられたであろう。遠藤秀三郎と尺秀三郎を別人のように扱っているがこれは同一人物である。ライプツィヒ大学留学時代はまだ遠藤姓であり、「孔子の生涯と教育学的意義」(*Das Leben und die pädagogische Bedeutung des Confucius*)と

題する学位論文も Hidesaburo Endo で書かれている。帰国後、尺振八の養子となった。独文学者の上田整次はドレーズデンの部の「受け入れ機関不明，その他」に分類されているが、私が1989年にライプツィヒ大学文書館で調査した時のカードメモを見ると、この人も同大学に1909/10年の冬学期から1911/12年の冬学期まで在学している。そのことは内田貢編『上田整次先生の思出』（昭和31年）を見ても明らかである。尾越辰雄（1868－1923）はライプツィヒ大学で学位を取得しているので、審査期間を3カ月と見て同大学を受け入れ機関としては考えられないか。不明とするよりいいように思われる。それから聴講生の場合は（例えばライプツィヒ大学の新村出）その旨の記載が欲しいと思う。正規の学生として入学した場合、受講した講義題目が分かるが、聴講生の場合はその記録が無いのが普通だからである。だがこれは望蜀の嘆であろう。なお序ながら、第3章「来日したザクセン関係者」中のエミール・ユンカーの出生地は東大及び金沢大学蔵の履歴書によると、ビショッフスヴェルダ市近くのヴィッ（ワイ）ケルスドルフであることを付記しておきたい。

それはともかく、こうした仕事は確かに根気が要るが、論文を書くのとは別の楽しみもあるものである。つまり不明だったことが資料を博捜することで明らかになっていく過程である。著者は元来ザクセン経済史の研究家であるので、同州に対する思い入れもひとしおであったろうと想像される。そこからこの地域に滞在した過去の日本人に思いを馳せ、彼らのデータを収集したいとの強い希望を抱いたに違いない。それが長年の努力を経てこういう本となって結実したのであるから著者の喜びはいかばかりであったか。本書を寄贈された時まず、そう思った。なお、私事にわたって恐縮だが、返礼として拙著『九州の日独文化交流人物誌』訂正第2版（熊本大学文学部地域科学科発行，2004年，非売品）を謹呈したところ、それを参照できなかったことを大変に残念に思うとの返事を頂いた。先行文献の網羅を何よりも心がける著者だけに、もっと早くお送りすればよかったと後悔した。拙著は第6章に関しては安東清人，木下周一，相良元貞，緒方正規，北里 闌，鍋島直繩，片山孤村を，第3章に関してはリヒトホーフェン，バルツをそれぞれ取り上げている。

昨年10月、ドレーズデンでは聖母教会が見事に再建され、ザクセンの首都はそのシンボルを取り戻した。そして日本ではそれを祝うかのように『日本＝ザクセン文化交流史研究』が出版され、それによって日独の長く、緊密な交流史を確認できたことは喜ばしい。